膝蓋下脂肪体炎の併発が疑われた変形性膝関節症に対する鍼治療
—1 症例報告—

荒木 憲人[1)]，今枝 美和[2)]，井上 基浩[2)]

[1)] 臨床鍼灸学専攻大学院修士課程，[2)] 鍼灸学部はり・きゅう学講座

【目的】変形性膝関節症と膝蓋下脂肪体炎の併発が疑われる症例に対して鍼治療を行い，良好な経過が得られたので報告する．
【症例】66 歳，男性．主訴：右膝痛．現病歴：以前より症状を自覚．近医にて計 4 回の関節内注射を受けるも効果がないため，本学附属病院整形外科を受診．変形性膝関節症と診断され，鍼治療を開始．現症：膝内側関節裂隙部・膝蓋骨下端内側部に強い疼痛・圧痛を自覚．膝関節伸展時に症状増悪．Hoffa sign：右陽性．鍼治療：大腿四頭筋・ハムストリングス・下腿三頭筋の筋腱移行部，前脛骨筋運動点，内側関節裂隙部，膝蓋靭帯内側縁，鵞足部に単刺術（1 回／週，計 12 回）．評価：膝痛の程度の Visual Analogue Scale（VAS，mm：毎回の治療前後，治療終了 1 ヶ月後），Western Ontario and McMaster Universities Osteoarthritis Index（WOMAC，点：治療開始前，治療終了後，治療終了 1 ヶ月後）．
【経過】VAS は，初回治療前 100→直後 22→最終治療前 15→1 ヶ月後 40 となった．WOMAC は，Pain score：55→90→75，Function score：47→83→64 となった．
【考察】症状・所見から，膝蓋下脂肪体炎が主因であると推察され，一定期間の継続した鍼治療が有効に作用した可能性が考えられた．作用機序の 1 つとして，過緊張状態に陥った下肢筋を弛緩させたことによる可能性を考えた．

本学看護学部学生の協同作業に対する認識の現状

河原 照子，松岡 みどり

看護学部地域保健看護学講座

協同とは，同じ目的のために複数の個人がともに心と力をあわせ，助け合って仕事をすることであり，将来医療チームで仕事をすることになる看護学生は，協同作業を肯定的に捉えられ，実践できる能力が求められる．本研究では本学の学生の協同作業認識の現状および特徴を知ることで，協同することに対する肯定感を高める協同学習について検討する際の資料とすることを目的とした．

研究方法には，長濱ら（2009）の開発した「協同作業認識尺度」を使用し，統計には一元配置分散分析を行った．結果，「協同効用因子」についての学年間の有意差は認めなかった．有意差を認めたのは「個人志向因子」が 1 年生と 4 年生の間（$p<0.01$），「互恵懸念因子」については，1 年生と 4 年生に強い有意差（$p<0.005$）がみられ，また，3 年生と 4 年生の間（$p<0.05$）でも有意差を認めた．また，因子間ではなく，下位の質問項目についての各分析では，「協同効用因子」のうち，9 項目中 2 項目で，1 年生と 4 年生の間に，「個人志向因子」では 6 項目中 2 項目で 1 年生と 4 年生の間に，「互恵懸念因子」では 3 項目すべてにおいて 3 年生と 4 年生の間に有意差を認めた．

本学の学生は 4 年生になるにつれて，協同に対する肯定感は向上していたことが分かった．しかし，本研究は横断的研究であるため，今後は縦断的調査の実施にて各学年の変化およびその要因を明らかにすることが課題と考える．

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine